



ビジネスチャンスを生む「僑郷」への帰国  
——中国浙江省青田県の事例から——

山本 須美子

徐 輝・鄭 楽静\*

The Return Home of Overseas Chinese for Business Opportunities: A Case Study  
of Qingtian County, Zhejiang Province, China

YAMAMOTO Sumiko

XU Hui・ZHENG Lejing

Abstract

Over centuries, many Chinese have migrated overseas from Qingtian County, Zhejiang Province, China. This paper aims to shed light on how Chinese returnees from overseas make decisions on migration and return in the transnational social space that connects their migration destination and homeland.

Qingtian County, Zhejiang Province, is a county located west of Wenzhou City, which is a major city in Zhejiang. Many Chinese migrated to Europe from the county over the centuries. Since the reform and open-door policy in 1978, there has been a surge in the number of people migrating overseas from Qingtian County. However, in the early 2000s, Europe experienced an economic downturn, while China achieved economic growth. Therefore, the number of overseas migrants from Qingtian County has decreased. On the other hand, there has been a notable tendency for earlier overseas migrants from Qingtian County to return to the county.

This paper focuses on former Chinese migrants who returned from Europe in the 2010s. They are currently managing or working at shops in Qingtian Imported Commodity City for Chinese returnees which was opened in 2015. The Imported Commodity City was developed as part of the overseas Chinese investment promotion project led by the Qingtian County government.

---

\* 山本須美子：東洋大学社会学部；Faculty of Sociology, Toyo University, 5-28-20 Hakusan, Bunkyo ku, Tokyo, 112-8606 / yamamoto-s@toyo.jp

徐輝：温州大学外国語学部；School of Foreign Studies, Wenzhou University, Chashan University Town, Wenzhou City, Zhejiang, Province, China, 325035 / 20150215@wzu.edu.cn

鄭楽静：寧波大学外国語学部；School of Foreign Studies, Ningbo University, 818 Fenghuailu Jiangbei Qu Ningbo City, Zhejiang, Province, China, 315211 / teirakusei@hotmail.com

Authors Xu (徐) and Zheng (鄭), who reside in Zhejiang Province, conducted an interview with twelve returnees from Europe. The life-history interviews took place in Qingtian County between July and August 2020. Since the study was conducted during the concurrent COVID-19 pandemic, the results of the interviews also elucidated the impact of the global pandemic.

Prior recent research on the changes in the Qiaoxiang have indicated a shift towards tourist resources [Kawaguchi 2019], an increasing presence of domestic Chinese migrant workers [Inazawa 2016, Kaneshiro 2016], and the introduction of foreign-capital businesses especially with the establishment of the Foreign Investment Development Zone [Li 2005a]. This study shows how the establishment of the Imported Commodity City and preferential treatment policies have fostered changes in Qingtian County as a site of business opportunities.

Furthermore, in the life histories of the survey subjects who returned to Qingtian County, there was a transformation into Luis Guarnizo's "transnational habitus" [Guarnizo 1997] from the migrant habitus of those who emigrated to Europe based on the former construct – that "overseas/Chinese immigrants are rich, while China/Chinese in hometowns are poor." The transnational habitus found among the survey subjects who are in their 40s and 50s is expected to undergo further transformation while being passed down to the generation of growing children in the context of migration.

**キーワード：**青田県、青田県僑郷輸入商品城、帰国者、僑郷、移民ハビトゥス

**Keywords:** Qingtian, Qingtian Imported Commodity City, Chinese returnees from overseas, Qiaoxiang, immigrant habitus

## はじめに

本論は、古くから多くの海外移住者を送り出してきた中国浙江省青田県に、近年ヨーロッパから帰国した青田県出身者のライフヒストリーの分析を通して、彼ら/彼女らが移住先と出身地を結ぶトランスナショナルな社会的空間の中で、どのように移動の選択しているのかを明らかにすることを目的とする。

浙江省青田県は、浙江省の中心都市である温州市の西に隣接する県の一つで、古くから多くの海外移住者を主にヨーロッパへ送り出してきた。青田県から海外への出稼ぎは、清朝末期から始まったといわれているが [山下他 2012: 2], 1978 年改革・開放以降、青田県からの海外移住者は急増した。しかし 2000 年代になると、ヨーロッパの経済不況と中国の経済発展によって、青田県からの海外移住者は減り、逆に海外移住者が青田県に帰国する現象が顕在化するようになった。本論で焦点を当てるのは、2015 年に開業した青田県政府主導の華僑投資誘致プロジェクトの一環である青田県僑郷輸入商品城（以下、商品城と略記する）に

店舗を構える、あるいはそこで働くほとんどが 2010 年代以降のヨーロッパからの帰国者である。

青田県からの移住者が最も多いスペインと中国間を移動する若者を対象に移動性について論じたマスデウ [2018] は、青田県では移住が社会構造の重要な一部に位置づけられ、トランスナショナルなやり取り（送金・寄付・投資・返金）を基礎とする一連の観念形態・価値観・信念が構築されていると述べている。そして、長年に亘って構築されたこれらのトランスナショナルな紐帯は、ブルデューが述べる一つのハビトゥスを形成しているとして「移民ハビトゥス」として捉え、世界の変化や構造的条件の影響で変化すると述べている [マスデウ 2018: 161]。本論では近年のヨーロッパから青田県への帰国者のライフヒストリーを分析することを通して、商品店の開業や新型コロナウイルスのパンデミックが青田県にもたらした変化の特徴を明らかにし、さらに帰国者とその家族にみられる移民ハビトゥスの変容について考察する。

なお、本論が対象とする浙江省青田県は、古くから多くの海外移住者を送り出してきたので、「華僑の故郷」を意味する「僑郷」<sup>1)</sup>といえる。「僑郷」に関しては様々な研究がされてきたが、僑郷研究を批判的に検証した川口 [2016] は、僑郷研究にみられる華僑華人と僑郷との関係を捉える特殊性として 3 点を指摘している。第一に海外 / 華僑は豊かであり、中国 / 僑郷は貧しい、第二に両者は本源的に、かつ強く結びついている、第三に、僑郷は広東・福建に代表されることである [川口 2016: 10]。川口・稲澤編 [2016] は、各執筆者が個別事例研究に基づいて、3 点に集約される所与のものとして本質化される華僑華人と僑郷との関係性を脱構築することを試みている。本論は、「僑郷」として捉えうる浙江省青田県への帰国者を研究対象としているが、川口・稲澤編 [2016] が批判的に検討した華僑華人と僑郷との関係の特殊性を前提としておらず、より広く、国際移動というマクロな人の移動の中でヨーロッパから青田県への近年の帰国現象を捉える。

伝統的な華僑華人研究の視座からでは解明することのできない新たな移動現象を考察するための第一歩として、奈倉 [2018] はその編著書 [奈倉編 2018] の序章において、華僑・華人ではなく「中国系新移民」という用語を用いている。「中国系新移民」とは、①改革・開放以降に中国（大陸）から移住した中国人、②海外在住の中国系の人々で別の国へ再移住した人々、③海外在住の中国系の新世代、④③の中で親戚訪問、留学やビジネスのために中国にやってきた人々を指すものと定義している [奈倉 2018: 12]。奈倉編 [2018] では、中国

1) 奈倉によると、僑郷とは、華僑華人の父方祖先の出身地で、中国沿岸地方の広東・福建が中心である。この地域は、市場経済が突出しているため、海外華人との互惠的結びつきが親密であった。僑郷は単に華僑華人の出身地というだけではなく、中国を取り巻く政治的・経済的・社会的な環境の変化によって意味付けられ方が変わる可変的な概念である [奈倉 2016: 193]。

政府の政治的・経済的政策転換による中国から / への人の移動の変化、及び欧米やアジア諸国において現地化が進んだ若年世代の中国との関係性が論じられている。本論では、奈倉編[2018]と同様に対象者を「中国系新移民」として捉え、中国系新移民の僑郷への帰国現象を分析対象とする研究として位置づける。

調査は、2020年7月と8月に青田県において、浙江省在住の徐と鄭が、12名のヨーロッパからの帰国者に中国語でライフヒストリーを構築するインタビューを実施した。Covid-19のパンデミックが世界中を混乱させている渦中での調査では、コロナ禍の影響についても尋ねた。

論文構成としては、第Ⅰ章では、第一に青田県からの海外移住の歴史と現状を検討する。全体の概要を述べた後、第Ⅲ章で事例として取り上げる対象者4名の移住先であるスペインとイタリア、セルビア、フランスへの青田県からの移住史について述べる。第二に近年の青田県への帰国者増加や商品城の開業をめぐる経緯について明らかにし、第三に先行研究を整理し本論の位置づけを述べる。第Ⅱ章では、調査概要を述べ、対象者にみる海外移住の理由や海外での生活、その後の帰国理由、そして新型コロナウイルスの影響について検討する。第Ⅲ章では、スペインとイタリア、セルビア、フランスからの帰国者4事例のライフヒストリーを検討し、移住先の状況の違いや移住後の生活、家族の移住経験について明らかにする。この4事例を取り上げたのは、それぞれ異なる歴史的背景の中でどのように海外に移住し、移住先の事情によってどのように帰国の選択をしたのかを明らかにすることによって、ヨーロッパ各国からの青田県への帰国者の特徴を把握できるからである。さらに、対象者の中で移民ハビトゥスの変容を読み取ることができる事例を取り上げた。第Ⅳ章では、第Ⅱ章と第Ⅲ章のデータを踏まえて、商品城の開業が僑郷としての青田県にもたらした変化の特徴を明らかにし、帰国者とその家族にみられる移民ハビトゥスの変容について考察する。

## Ⅰ 海外移住の歴史と帰国をめぐる現状

本章では、第一に青田県からの海外移住の歴史と現状を明らかにする。全体の概要を述べた後、第Ⅲ章で事例として取り上げる4名の移住先であるスペインとイタリア、セルビア、フランスへの移住史について述べる。第二に近年、青田県への帰国者が増加している現象や、2015年の商品城の開業をめぐる経緯について検討する。第三に、先行研究を整理し、本論の位置づけを述べる。

### 1 海外移住の歴史と現状

青田県は中国浙江省南部の最大都市である温州市の西に隣接する県であり、歴史的にも経

済的にも温州市の影響を強く受け、温州都市圏に属している。青田県の総面積のうち、山地が 89.7%を占めて、平地が 5.3%、水域が 5%で、耕地は総面積の 5.3%にすぎず、まさに「九山半水半分田」（山地が 9 割、残りは水面と耕地が半々）と言われるほど山の多い地域である。青田県内には、特に多数の海外移住者を送り出した地区があり、いずれも山間部に位置している [山下他 2012: 4-5]。

青田県から海外への出稼者は青田県特産の青田石の加工品を海外で売り歩くことから始まった。行先はヨーロッパが多く、1949 年に中華人民共和国が成立する以前は、フランスやロシア、オランダ、ドイツ、イタリアが主な行き先であった。1978 年の改革・開放以降、人の移動の制限が緩み海外移住が容易になり、青田県からヨーロッパへの移住者も増加した。特に 1990 年代以降は出国ブームが急激に高まった。青田県基本僑情調査分析報告によると、2014 年における海外在住の青田県出身者の内、1978 年以降の出国者は 203,200 人、出国者総人数の約 73.29%を占め、そのうち、90 年代の出国者比率は 19.58%、2000 年以降のそれは 50.53%で、青田県において 90 年代から 2000 年代をピークに、出国ブームが起きたことが読み取れる。そして、約 23.28%は海外生まれである [青田県人民政府僑務弁公室・青田県統計局・青田県帰国華僑連合会 2015: 6-8]。

表 1 2014 年浙江省青田県海外移民の移住時期

移住時期	比率 (%)
1949 年以前	0.21%
1949-1978 年	0.27%
1979-1989 年	3.18%
1990-1999 年	19.58%
2000 年以降	50.53%
移住時期不明	2.95%
海外生まれ	23.28%

出典：青田県人民政府僑務弁公室・青田県統計局・青田県帰国華僑連合会 [2015: 8]

青田県出身者は約 120 カ国と地域へ移住し、総計 329,296 人にも達している。そのうち、中国国籍保持者は 279,646 人、移住国の国籍保持者は 48,262 人、香港・マカオ移住者 839 人、その他は 549 人である。海外に移住した青田県出身者の 91.31%がヨーロッパに集中し、2 番目の南アメリカは 6.77%、3 番目の北アメリカは 0.62%である。移住先のヨーロッパ諸国の中では、スペインが 100,237 人で最も多く、次にイタリア、ブラジル、フランス、ポルトガル、オーストリアの順となっている。特に 90 年代末から 2000 年代初期にかけて海外移住

ブームが起き、2000年以降の出国者は約14万人にも達している〔青田県人民政府僑務弁公室・青田県統計局・青田県帰国華僑連合会 2015: 46-47〕。

表2 青田県から海外への移住人口（上位10か国）（2015年）

順位	国	人数（人）	順位	国	人数（人）
1	スペイン	100,237	6	オーストリア	7,464
2	イタリア	87,832	7	ドイツ	6,103
3	ブラジル	18,243	8	オランダ	4,267
4	フランス	10,500	9	セルビア	3,586
5	ポルトガル	9,458	10	ベルギー	3,248

出典：青田県人民政府僑務弁公室青田県統計局・青田県帰国華僑連合会〔2015: 46-47〕。

青田県出身者の最大の受け入れ国であるスペインでは、1980年代の初めには、まだ中国人口は少なく、1,000人にも達していなかった。スペイン政府が1985年7月に制定された法律に基づいて初めて実施した、一定の条件を満たしていれば不法移民に対して居住または居住労働許可書を与える正規化後の1986年以降から中国人口は徐々に増加した〔Nieto 2003: 219-220〕。1986年と1991年の2回の正規化によって、中国人口は前年の50%増となった。1980年代からの観光業が発展したことも、中華レストランの増加と労働力としての家族呼び寄せを促した。また、浙江省青田県や温州市からの以前の移住者によって確立されたネットワークの再活性化によっても移住が促進された〔Nieto 2003: 219-220〕。中国人がマドリードとバルセロナの特定の地域に集まり可視化し始めたのは1990年代前半であり、1990年代後半になるとその傾向がより強くなった〔Beltrán 2005: 286〕。スペインの中国人口は2020年現在で197,390人であるが〔INE 2020〕、その中で最大の集団は青田県出身者であり〔Nieto 2003: 219〕、温州市も含めた浙江省出身者が約70%を占め、学歴は低い者がほとんどである〔Masdeu 2014: 6〕。

青田県からイタリアへの最初の移住は1894年で、青田石彫石細工の行商人であった。1920年代から30年代までは青田県からイタリアへの移住者の多くは行商人であったが、やがて店舗を構えるようになった。また、一部の移民は工場で単純労働に従事していた。改革・開放後、特に1980年代以降、イタリアの寛容な移住政策に惹かれ、多くの青田県出身者がヨーロッパ諸国または中国本土から続々とイタリアへ移住/再移住した。現在、ミラノ、プラート、フィレンツェ、ローマなどの都市を中心に活躍している。イタリアの青田県出身者は主に飲食業、貿易、アパレル業と皮革産業に従事している〔青田華僑史編纂委員会 2011: 48-51〕。

中国からセルビアへの移住の歴史はそれほど長くない。1990年代中頃から中国人口が増

加し始め、1990 年代末から 2000 年代初めに頂点を達し、2008 年の経済危機以降、徐々に減少している。2015 年のセルビアにおける中国人口は約 6,000 人である。在セルビア中国人のほとんどは青田県、温州市と金華市出身者である。また、1988 年、中国とハンガリー間の移動にはビザが必要なく、中国ではハンガリーへの移住ブームが起きた。1991 年ハンガリーは再びビザ制度を打ち出し、1992 年に中国人不法移民を追い出す運動を行ったため、一部の中国人はハンガリーから離れ、そのうちセルビアへ再移住した者も多かった。セルビアの中国人の大部分は首都ベオグラードに集中し、アパレルや日用品などの輸出入業に携わっている。2017 年在セルビアの青田県出身者は「セルビア麗水商会」を創設し、鄒軍勇が会長を務めている [張 2018]。

青田県からフランスへの移住の歴史は古く、19 世紀末から 20 世紀初期に生計を立てるために、青田石彫石細工の行商人がフランスへ渡った。第一次世界大戦中、約 2,000 人の浙江省出身者がフランス政府の華工募集に応募し、フランスで道路工事や銃弾製造などに従事し、終戦後、多数がフランスに残留した。1949 年までにフランスの青田県出身者は 3,900 余人に達し、パリのリヨン駅付近に集住し、青田県出身者のコミュニティを形成した。改革・開放後、青田県では海外移住ブームが高まり、多数の人はフランスの親戚を頼り、不法移民などのルートでフランスへ移住し続けた [青田華僑史編纂委員会 2011: 31-37]。

以上、スペインとイタリア、セルビアとフランスへの青田県からの移住の歴史的背景の概要を述べた。まとめると、1990 年代から青田県からの移住者数が急増したのはスペインとイタリアで、新たな中国系コミュニティを形成した。セルビアへの移住は 1990 年代から始まったが、移住者数は少なく、ハンガリーからの再移住者も多い。フランスは移住の歴史が長く、古くからの青田出身者コミュニティに、改革・開放以降新たに青田県からの移住者が流入したが、その人数はスペインやイタリアへの移住者ほど多くはない [表 2 参照]。

## 2 帰国者の増加と青田県僑郷輸入商品城の開業

僑郷という言葉が使われ始めた 1940 年代の末以降、とりわけ改革・開放以降、移民たちは出身コミュニティとの紐帯を、出身コミュニティは移民たちからの送金や寄付や投資を大いに欲していた [川口 2019: 50]。

海外移住者による出身地への最初の経済的還元は、出身地の親族への送金であるが、経済的に成功するにつれて、送金から寄付へ、さらに投資へと変わっていく [山下他 2012: 12]。青田県も海外移住者からの送金や寄付、投資などによって経済は活性化した。海外移住者からの投資は飲食業、ホテル業、鉱山業、スーパー等の小売業、水力発電所、不動産業、貿易業など多岐の分野に及んだ。しかし、長年中国から離れ、国内の市場やビジネスの慣習などに慣れていないため、多くの海外移住者による中国投資ビジネスはそれほど成功していなかつ



た。特に青田県内で成功を収めたのが主に不動産業への投資であるため、投資が不動産業に集中するようになった<sup>2)</sup>。1991年から2008年の間に、華僑による青田県の不動産開発投資総額は50億元にも及んだ〔青田華僑史編纂委員会 2011: 142〕。さらに、2008年の世界金融危機やその後2009年のギリシアに発端したユーロ圏の金融危機は、ヨーロッパへの移住者に大きな影響を及ぼした。ヨーロッパの経済不況ゆえに、移住者はビジネスの拠点をヨーロッパに置きながら、中国への投資により積極的に参入するようになったのである。

青田県から海外への移住者が増え続ける一方、中国の経済発展や多様な華僑資本誘致優遇政策により、90年代末から海外在住者の中には中国への投資に伴って帰国する者も増加し始めていた。2008年のヨーロッパ経済危機は帰国ブームに拍車をかけた。1999年以前の帰国者は青田県からの海外移住者全体のわずか1.88%であったが、2000年から2008年までは18.57%と緩やかに増え、2008年以降は79.56%に急増した〔青田県人民政府僑務弁公室・青田県統計局・青田県帰国華僑連合会 2015: 48〕。

中国への帰国者の増加に伴って、青田県からの海外移住者による中国への投資も増加した。2015年の統計によると、青田県出身者の資本による企業は合計491社、中国の22省に分布し、その83.7%は浙江省内に集中している〔青田県人民政府僑務弁公室・青田県統計局・青田県帰国華僑連合会 2015: 6-7〕。青田県には平地が少ないため、青田県内の投資は不動産業と飲食業が中心である。しかし、青田県政府は、不動産投資はマンションの販売価格を高く押し上げるだけで、青田県の経済活性化にそれほど役立たないと考え、青田県からの海外移住者が安心して投資を誘致する戦略を立てた。商品城の設立はその代表的なプロジェクトである。

中国で起業する際に、海外在住青田県出身者の強みはそのネットワークである。彼らは長年海外でのビジネスで蓄積してきたノウハウや人脈で、世界各国から品質のいい商品を容易に仕入れることができる。青田県政府は「全世界から仕入れ、中国で販売」というスローガンを出し、海外移住者の強さを発揮できる場を提供するために、商品城の建設計画を打ち出した。

2013年に青田県商務局主導の下、浙江青田県僑郷輸入商品城有限公司が設立され、商品城の建設、投資誘致、管理などを担った。商品城は青田県油竹街道に位置し、総面積は33.9万㎡に達している。建設計画は二期に分けられ、第一期は5つの市場、第二期は貿易物流センター、展示会センターを含む大規模なショッピングモールを建設する予定である。2015年1月27日に第一市場、11月7日に第二市場、2016年9月30日に第三市場、2017年9月24日に第四市場が開業した。2020年現在第一期の4つの市場が運営されている。この4つの市場の総面積は6.5万㎡で、174社（主に華僑資本）が進出し、雑貨、ベビー用品、食品、

2) 2011年7月30日に徐と鄭が実施した青田県帰国華僑連合会弁公室主任へのインタビューに基づく。



洋服、ワインなど 60 カ国の 5 万品種以上の商品を取扱っている。商品城は 2015 年 1 月に開業して以来、売上が 23.5 億元にも達した。青田県の輸出入貿易や、飲食業、観光業などにも活気を与え、経済の相乗効果が得られた [青田県僑郷輸入商品城 2018: 1-7]。

そして、青田県政府は華僑資本企業を商品城に誘致するため、一連の優遇政策を打ち出した。例えば、1 年目の賃貸料の 80%、2 年目は 60%、3 年目以降は 50%の減免や税金の免除などが実施された。さらに、商品城を全国にアピールするために、2018 年 11 月 17 日から 19 日にかけて、商品城で「第一回世界華僑輸入商品博覧会&青田輸入ワイン展覧会」を開催し、600 社の海外企業を招待した。この催しは大盛況であり、商品城を国内外に知らせることができた [青田県文化与広電旅行体育局 2019: 14]。商品城の開業は、青田県へ帰国者の増加をもたらした。スペインからの帰国者が最も多かった。本論では商品城で貿易会社やレストランを経営している帰国者を主な研究対象としている。

### 3 先行研究の整理と本論の位置づけ

僑郷研究を概観した奈倉 [2016] は、海外華人と僑郷との経済協力関係、宗族の紐帯関係について、双方のつながりを考察した研究が多いと述べている [奈倉 2016: 194]。近年の日本人研究者による僑郷研究としては、山下編 [2014] や川口・稲澤編 [2016]、川口の研究 [2019] が挙げられる。山下編 [2014] では、改革・開放以降に増加した中国から海外への移住者が僑郷に及ぼした影響を、中国での現地調査に基づいて明らかにしている。福建省福清市、浙江省青田県、中国東北地方が事例として取り上げられている。

川口・稲澤編 [2016] では僑郷研究の脱構築を目指し、各執筆者が広東省や福建省、延辺朝鮮族自治州、マレーシア等の事例に基づいて、中国からの海外移住者と「故郷」との関係性の変化を析出している。川口 [2016] は、珠江デルタ地域において、「豊かな海外、貧しい僑郷」という構図が当てはまったのは 1970 年代末から 2000 年代を少し過ぎるころまでであったと指摘している。僑郷は豊かになり、移民は海外に出ず、海外からの援助も必要としておらず、もはや僑郷ではなくなっていると述べている。広東省東部の汕尾を調査地とする稲澤 [2016] によると、この地域は経済発展を遂げているものの珠江デルタ地域には及ばず、多くの移住者が住む香港は依然として豊かなあこがれの地である。内陸部に比べれば格段に豊かなこの地には国内からの出稼ぎ移民が多く暮らすようになり、「豊かな海外/香港移住者」「そこそこ豊かな僑郷/自分たち」、「貧しい内陸/出稼ぎ移民」という、主として経済的な指標に依拠した新たな階層構造が表象されつつあると指摘されている。兼城 [2016] は、アメリカに向かう移住の波が依然として勢いを失っていない福建省福州市の僑郷の事例に基づいて、僑郷で実施される神祇祭祀が海外からの送金と出稼ぎ移民によって成り立っていることを明らかにしている。以上の稲澤論文と兼城論文は出稼ぎ移民の存在感が大きくなっていることを、

僑郷の新しい特徴として指摘している。さらに、川口〔2019〕は、江門・開平で行った現地調査に基づいて、21世紀の僑郷が当事者たちをつなぐための装置から特色ある観光資源へと変わりゆく過程および現状を明らかにしている。

中国では改革・開放後、僑郷研究が中国国内の研究者の注目を集め、多くの成果が蓄積され、2000年代になると広東省、福建省、広西省、浙江省などでは僑郷文化研究センターが相次いで設立された。中国人研究者による福建省の僑郷研究としては、陳達〔1938〕の『南洋華僑与閩粵社会』が古い。福建僑郷研究の多くは、政治、経済、華僑送金、華僑慈善事業、地域文化などを取り上げて検討している。代表的な研究としては、人類学的アプローチからの陳国強〔1994〕や社会学的アプローチからの林〔2019〕等がある。

そして、福建省の僑郷の変化について検討した中国人研究者による代表的な僑郷研究として李編〔2005〕が挙げられる。李明欽と5名の中国人研究者による長年にわたる福建省における僑郷でのフィールドワークに基づいて僑郷の変化について述べている。伝統的な僑郷新安村に関する論文〔李 2005a〕と、新しい郷村である福建省北部明溪縣沙溪村に関する論文〔李 2005b〕には福建省における対照的な僑郷の変化が描かれている。福建省厦门市海滄区の新陽工業区に位置する新安村は、19世紀から20世紀にかけて、華僑送金により村が経済的に繁栄していた。1930年代から40年代の戦争により、東南アジア華僑と故郷のつながりが途切れて送金が届かなくなったため、村民は再び農業や漁業に従事し生活水準が落ちた。改革・開放後、海外の新安村出身者は伝統文化の復興を掲げ、故郷で霊廟の建設、慈善事業などに巨額な資金を注いだ。特に1989年、海滄区に「海滄台商投資開発区」が設立され、90年代から外資企業が續々と入ってきて農村社会から脱却した。新安村の人口は約7,000人で、その内70%の村民は邱という苗字を持っているが、2002年調査時のこの村の外来人口は2万人にも達していた〔李 2005a〕。新しい郷村沙溪村については、出現する発端となったのは、この村から1989年に初めてヨーロッパに渡り、「この地の英雄」となった男性のイタリアへの移住であった。彼の移住が引き金となり、その後イタリアへの連鎖移民の波が生まれ、この村は新しい郷村となったと述べられている〔李 2005b〕。

本論で対象とする青田県に関しても、多くの研究業績が蓄積されてきた<sup>3)</sup>。その内の一つである山下他〔2012〕では、伝統的な僑郷であった青田県が、新たな海外移民を送出することにより、僑郷としての特色がいかに変容したかについて地理学的アプローチから青田県での現地調査に基づいて考察している。19世紀末から関東大震災までは、青田県からの出稼ぎ者はヨーロッパよりも日本に来る者が多かったが、震災後は日本への出稼ぎは途絶え、ヨーロッパが主要な出国先となった。改革・開放政策の進展に伴って増加した海外移住者による送金

3) 青田県からの海外移住者に関する先行研究については、山下他〔2012: 2-4〕に整理されている。

や寄付、投資により青田県の経済は発展し、都市化が進んだ。さらに移住者が持ち込んだヨーロッパ文化は、青田県の景観や食文化に影響を与えたと指摘されている。

以上のように、僑郷について多角的視点から多くの研究が積み上げられてきた。本論は、これまで着目されたことのない青田県での商品城開業に伴う新たな帰国現象と新型コロナウイルスの影響を検討することによって、これまで指摘されていなかった近年の僑郷における変化について新たな知見を提供できると考える。

さらに、本論では、青田県からの海外移住者を中国系新移民として捉え、ライフヒストリーの分析を通して、近年の青田県への帰国現象が移民ハビトゥスにどのような変化をもたらしたのかを考察する。中国系新移民の帰国に関する研究は主に帰国留学生を研究対象とし、それ以外の帰国者に関する研究は少ない。許 [2005] は、1979 年以降に日本へ移住し、一年以上の滞在を経て帰国した福建省出身者を対象に実施したインタビューに基づき、帰国理由、帰国後の適応状況や日本とのつながりなどを検討している。また、移住国別の帰国者についての研究も実施された。例えば、カナダからの帰国者に関しては、向 [2008] や程 [2017] の研究、オーストラリアからの帰国者に関しては、顔・張 [2015] の研究がある。これらの研究は国別の経済や政治事情を分析し、帰国者の帰国理由について明らかにしている。

青田県への帰国者を対象とした研究は僅かで、陳程 [2016] とマスデウ [Masdeu 2014, マスデウ 2018] が挙げられる。陳程 [2016] は博士論文で、浙江省への帰国者を取り上げ、統計データに基づき人口学的視点から帰国者の特徴を詳しく分析している。結論として、帰国者は高度人材が中心で、帰国地は故郷ではなく、浙江省杭州市や寧波市など長江デルタに集中していると指摘された。

スペイン人人類学者マスデウの博士論文 [Masdeu 2014] は、数年にわたる青田県とスペインでの現地調査に基づいて、文化人類学的アプローチからスペインと中国間を移動する人々にみるトランスナショナリズムについて論じている。帰国者については、1990 年代に 17 歳から 20 歳でスペインへ移住した後、青田県に帰国して 10 年未満の人を対象にインタビューを実施している。対象者は、スペインで飲食業に携わり、帰国後に青田県でヨーロッパ風のカフェをオープンしていた。結論として、スペインと中国間のトランスナショナリズムには、構造的変化や世代、階級、移動の仕方などの諸要因が複雑に絡み合い、社会文化的交渉や多元的アイデンティティが生み出されていると指摘している。さらに、マスデウ [2018] は、中国とスペイン間を移動する中国系次世代に焦点を当てて、スペインでの社会化プロセスと異世代移民カップルの事例の詳細な分析をしている。次世代にみる中国への移動経験は、社会的上昇のための戦略であり、成人後のアイデンティティや移動に影響を与え、多様性が生み出されていることが示されている。

本論は、スペインとイタリア、セルビア、フランスからの帰国者 4 名のライフヒストリー

の分析を通して、各国の異なる中国系移民の歴史的経緯を背景にして、どのように海外移住をし、移住先の事情によってどのように帰国の選択をしたのかを明らかにし、ヨーロッパ各国からの青田県への帰国者の特徴と移民ハビトゥスの変容を考察する。これによって、トランスナショナルな空間で生きる中国系新移民に関する人類学的研究に貢献したい。

## II 対象者にみる海外移住と帰国

本章では、第一に調査概要を述べ、第二に対象者にみる海外移住の理由や海外での生活、第三にその後の帰国理由、そして第四に新型コロナウイルスの影響について検討する。

### 1 調査概要

浙江省在住の徐と鄭は、予備調査として、2020年7月29日に青田県帰国華僑聯合会<sup>4)</sup>で関係者から青田県の帰国の現状に関して聞き取り調査を行った。海外からの帰国者の多くが青田県僑郷輸入商品城でビジネスに携わっているという情報を得て、青田県帰国華僑聯合会関係者の紹介で、雪だるま式サンプリング法を取り、商品城に関わる12名のヨーロッパからの帰国者に中国語でライフヒストリーを構築するインタビュー調査を実施した。中心的なインタビュー項目は、海外移住や帰国の理由、子どもの教育への考え方や家族の移住経験、新型コロナウイルスの影響である。インタビューにおいては、調査目的と調査結果を学術雑誌に匿名で掲載することをあらかじめ説明し、8名から録音の承諾を得た。4名<sup>5)</sup>からは録音の承諾を得ることができなかったためメモを取ったが、結果発表には同意を得ることができた。

対象者12名は11名が青田県生まれで、1名はスペイン生まれ、男性6名と女性6名である。年齢層は20代から50代まで広い。1990年代に海外移住したのは6名、2000年以降移住したのは5名である。移住先はスペインが7名で一番多く、イタリア2名、フランス、セルビア、タンザニアが各1名である。海外移住時の年齢は、16歳～36歳で、20代が最も多く、海外在住期間は7年～26年である。対象者は、全員中国籍である。

4) 青田県帰国華僑聯合会は1961年に設立され、麗水帰国華僑聯合会に属している県級華僑聯合会である。一番上の組織は「中華全国帰国華僑聯合会」である。

5) 録音の承諾が得られなかったのは、BさんとFさん、Iさん、Jさんである。

表 3 インタビュー対象者の属性表

No.	氏名	性別	年齢	出身地	移住国	移住年・移住年齢	帰国年・帰国年齢	職業
1	A さん	女	41 歳	青田県	イタリア	1995 年 16 歳	2014 年 35 歳	アクセサリ会社とレストラン経営者
2	B さん	女	54 歳	青田県方山郷龍現村	スペイン	1997 年 31 歳	2019 年 53 歳	レストラン経営者
3	C さん	男	47 歳	青田県高市鎮洞背村	イタリア	1992 年 19 歳	2015 年 42 歳	貿易会社経営者
4	D さん	男	39 歳	青田県腊口鎮	セルビア	2004 年 23 歳	2014 年 33 歳	貿易会社経営者
5	E さん	女	23 歳	青田県油竹町	スペイン	スペイン生まれ	2016 年 19 歳	父親の貿易会社経営の手伝い
6	F さん	女	45 歳	青田県	スペイン	2000 年 25 歳	2007 年 32 歳	貿易会社経営者
7	G さん	女	56 歳	青田県禎埠郷馬嶺脚村	スペイン	1996 年 32 歳	2015 年 51 歳	貿易会社経営者
8	H さん	女	44 歳	青田県温溪鎮	スペイン	1998 年 22 歳	2013 年 37 歳	貿易会社経営者
9	I さん	男	45 歳	青田県	スペイン	2000 年 25 歳	2019 年 44 歳	貿易会社社員
10	J さん	男	47 歳	青田県	フランス	2004 年 21 歳	2015 年 42 歳	貿易会社経営者
11	K さん	男	48 歳	青田県北山鎮	スペイン	1999 年 27 歳	2013 年 41 歳	レストラン経営者
12	L さん	男	55 歳	青田県油竹町	タンザニア	2001 年 36 歳	2011 年 46 歳	貿易会社経営者

## 2 海外移住の背景

対象者 12 名全員が、1990 年代後半から 2000 年代初めにヨーロッパに 10 代から 30 代で移住していた。これは青田県からの海外移住がピークであった時期である。E さんだけは、両親がスペインへ移住しバルセロナで生まれ育っていた。そして、対象者にはヨーロッパに在住する家族や親族がいた。I さんの場合、親族約 100 人がスペインやイタリアを中心とするヨーロッパに移住していた。

このような青田県における家族や親族の海外移住の背景には、中国とヨーロッパの経済格差があったことが指摘できる。多くの青田県出身者はヨーロッパの経済発展に惹かれて、巨額な借金を抱えても、海外へ行きたがったのである。両親や兄弟、配偶者を頼って出国する際には移住コストが割と低いが、BさんやHさんの場合のように遠い親戚を頼って出国の手続きをする場合は、高額な仲介料を払わなければならなかった<sup>6)</sup>。Bさんは、31歳の時にスペインでアパレル工場を営んでいる遠い親戚を頼って、就労ビザを得て正規ルートでスペインに移住した。Hさんは高校卒業後、しばらく民営企業で働いていたが、給料が低いため、遠い親戚の助いで13万円の仲介料を払い、1998年労務ビザでスペインに移住した。しかし海外で2、3年働けば借金を返済できると見込んで、積極的に海外ネットワークを利用して移住を望んだのである。

家族で一緒に移住する場合もあれば、GさんとIさんの場合のように配偶者が先に海外に移住する場合もある。Gさんは中国では薬剤師であったが、1995年にスペインに移住した夫に追随して、仕事を辞めて1996年にスペインへ移住した。Iさんの場合は、妻が1995年に先にスペインへ行き、Iさんは妻を頼って2000年にスペインへ渡った。女性か男性か、どちらの方が先に移住するという傾向はみられなかった。

### 3 帰国の理由

対象者は10代後半か20代で海外に移住し、7年から20年以上にわたって海外で生活した後で帰国していたが、帰国の主要な要因として2点が指摘できる。

第一は、ヨーロッパ経済危機と中国の経済成長という経済状況の変化である。2008年からのヨーロッパ経済危機は海外在住の青田県出身者に大きなダメージを与えた<sup>7)</sup>。イタリア政府は2009年から「不法移民を取締、灰色経済を取締」というスローガンのもとで中国系企業に対し厳しい検査を行い、多くの企業が検挙され閉鎖に追い込まれた。スペイン政府も同じく中国系企業を排除する姿勢を見せた。他方、近年の中国経済の急成長により、海外在住の青田県出身者にとって、膨大な中国市場は非常に魅力的なものとなった。

対象者は、2008年のヨーロッパ経済危機の前にヨーロッパへ移住し、2008年前後のヨーロッパ経済不況の影響で中国への投資を試み、2015年に開業した商品店で貿易会社を起業している。例えばAさんとGさんは、以下のように述べている。

6) ヨーロッパで店舗や会社を営んでいる青田県出身者は、中国から招聘する従業員の労務ビザを申請することができる。一部の人はこの労務ビザを故郷の出国希望者に高額な値で売って儲けていた。青田県では、近い親族ではないかぎり、ビザを含め、旅費などの出国仲介料を払うのが一般的である。

7) 例えばギリシアでは国内在住の約2万人の中国人の内30%がギリシアから離れると報道された[SINA 新波財經 HP 2011]。



私はビジネス市場の未来は中国にあると信じる。息子にも中国市場の可能性を知ってもらうために、一時帰国させたことがある。(A さん)

私は最初帰国を考えていなかったが、たまたま商品城開業のことを知って、その場所は私の実家と近いので、試しにと思って 2015 年に帰国し、第一市場に 200 m<sup>2</sup>の店舗を開業した。予想外に商売が繁盛し、2016 年から商店街沿いの 3000 m<sup>2</sup>の店舗を構えているよ。(G さん)

帰国の第二の理由として、「村官になること」を挙げることができる。2008 年に浙江省青田県で「華僑村官」が現れ、『人民日報』はこれを大きく報道し、海外華僑社会で大きな影響を呼んだ。青田華僑史によると、1991 年から 2008 年の間に、青田県に帰国して村官になった人は延べ 38 名で、主に村官や書記を務めた〔青田華僑史編纂委員会 2011: 297-299〕。陳鳳蘭〔2017〕は福建省明溪県の 17 村の帰国して村官になった人について調査に基づいて検討している。そして、2008 年に浙江省青田県で華僑村官が現れたことが明溪県の華僑村官ブームに影響を与えたと述べている。

対象者の中では、B さんの夫と E さんの父親が村官になるために帰国していた。B さんの夫は 2000 年にスペインへ密入国し、B さんと一緒に中華レストランを経営していたが、村官選挙のために帰国していた。また、E さんの父親は、1990 年にスペインへ出稼ぎに行き、アパレル工場や中華レストランの経営に成功した。しかし、彼はこのような経済的成功に満足できず、ちょうど 2016 年に出身村の村官選挙があったので、もう一回中国でチャレンジしたいという思いで E さんも含め一家を挙げて帰国を選んだ。

#### 4 新型コロナウイルスの影響

新型コロナウイルスは 2020 年初めから世界経済や人々の生活に多大な影響を与えている。商品城も政府の要請によって 2020 年の初めから約 2 ヶ月間閉鎖された。ほとんどの店舗は 30%から 70%ほど売り上げが激減した。青田県政府は商品城の経済活性化のために、積極的に一連の対策を打ち出した。第一に、店舗の賃貸料金 2 カ月分を免除する。第二に、中小企業補助金 2 万円を支給する。第三に、総額 1,300 元の商品城の商品券を県内の公務員に配布し、経済活動の再開を促進するというものであった<sup>8)</sup>。

対象者はこのような政策によって助かっていると語った。特にヨーロッパ諸国の新型コロナ対策と中国政府のそれとの違いを肌身で感じ、帰国の選択が正しかったと確信したと述べ

8) 2020 年 7 月と 8 月に鄭と徐の実施した調査に基づいている。



た。

セルビアに移住した D さんは、コロナ禍は良い影響と良くない影響の両方があるという。コロナ前と比べると会社の売上は約 40%下がったが、コロナ禍をきっかけに、D さんは自らの支援活動を通して、セルビアとモンテネグロの政府関係者とより一層よい信頼関係を築くことができた。新型コロナウイルスが拡大した初期、中国でも物資が足りない状況下、D さんは会社の名義で大量の支援物資を両国の政府に寄贈した。特に、D さん自身が 3 万枚のマスク、防衛服、手袋など約 19 箱の支援物資を車に積んで、青田県から北京へ 1,700 キロも運転し、セルビア政府とモンテネグロ政府へ寄贈した。

コロナの悪い影響というより、いい影響が大きい。今回のコロナは中国政府とセルビア政府とモンテネグロ政府との友好関係を促進した。わが社もたくさんの支援物資を両国政府に寄贈したので、セルビアの役人たちはネットでわが社のワインを推薦してくれたよ。(D さん)

私は中国政府のコロナ対策の効率性に魅了された。中国の強さに感心した。中国国籍を保持し、帰国してよかったと思っているよ。スペインのある青田人がコロナにかかり、彼は大金持ちで、700 万元を寄付して中国に帰りたいと願っても、結局外国人として扱われて、帰国できなかった。(H さん)

以上のように、中国政府の新型コロナウイルス対策は、海外在住の中国人や帰国者に中国政府の強みを示したといえる。中国国籍を保持していることの重要性を再認識させたので、今後、家族も含めて、海外移住者による移住先の国籍取得者が少なくなることも予期できる。

### III 帰国者家族にみる移住経験

本章では、スペイン、イタリア、セルビア、フランスからの帰国者 4 事例を取り上げて、それぞれのライフヒストリーを検討し、移住先である各国の状況の違いと、海外移住と帰国に伴う家族の移住経験について明らかにする。

#### 1 事例 1：H さん家族の場合

##### (1) スペインへの移住

H さんは 1976 年青田県生まれの現在 44 歳の女性である。青田県の高校卒業後、しばらく青田県にある企業で働いたが、1998 年 21 歳の時に遠い親戚を頼って、13 万元の出国仲介料

を支払い、スペインに移住した。親戚が経営するレストランで働くとも月給が 3,000 元と低いので、中国人の知り合いの経営する縫製工場で働くことを選んだ。当時、H さんは借金を返済するために、1 日 16 ～ 18 時間も働き、1 ヶ月で 12,000 元を手にすることができた。縫製工場で 3 年間働いた後、渡航のための借金を返済した。そして、2001 年には中国人の友人との共同経営で縫製工場を設立した。しかし、縫製工場の仕事が大変だったため、2003 年にはレストラン事業に転換し、2 年間レストランを経営した。その後、2005 年から 2014 年までは、弟と共同で 100 円ショップ<sup>9)</sup>を経営していた。

## (2) 帰国

H さんは 2014 年に青田県に帰国し、ワインの輸出入業に携わるようになった。2015 年には商品城にスペイン、フランスやイタリアなどのワインやハム、オリーブオイルなどの輸出入店舗を開業した。現在商品城で独立資本店舗を 2 社、合資店舗を 2 社経営している。いずれもワインやハムなどの輸入品を取り扱う店である。スペインから完全に撤退したのは 2017 年であり、それまでの 3 年間は青田県とスペインを行ったり来たりしていた。H さんは現在事業の基盤を青田県に置いているが、商品の多くはスペインから仕入れしたり、青田県でスペインのハム切り講座やワインの試飲会などのイベントを積極的に開催したり、今までの移住経験やネットワークを活かしながら、ビジネスを展開している。

帰国した理由としては、ヨーロッパの金融危機でスペインでのビジネスがそれ程上手くいかなかったこと、2011 年にスペインで中国人への排斥事件が起こったことなどによって海外生活に嫌気が差したこと、青田県の帰国奨励政策に惹かれたこと、そして、中国にいる親の面倒をみなければいけなかったことが挙げられた。

## (3) 家族の移住経験

結婚前の H さんは、兄 1 人と弟 1 人と両親の 5 人家族で、弟は H さんがスペインに移住してから 3 年後にスペインに移住したが、兄と両親は海外移住の経験はない。2005 年から H さんは弟と共同で 100 円ショップを経営していた。2014 年 H さんが帰国後は、弟が一人で店を営んでいる。

H さんは移住前に結婚していて、1995 年に息子が生まれた。長男は 16 歳まで青田県の祖父母の元で育ち、16 歳でスペインの H さんに合流した。現在 25 歳の長男はスペインで 100

9) スペイン語で *Todo a Cien* といい、スペインでよく見かける日常生活用品を取り扱う店舗である。中国から安い商品を仕入れるため低価で、店舗面積が狭く開店資金も少なく、家庭経営に向いているので、多くの青田県出身者がこの業界に参入している。しかし、近年欧州経済危機やネットショッピングの普及の影響による経営難で閉店した店舗も多い。

円ショップを経営していて、帰国する意思はない。Hさんはその後離婚したが、スペインで中国人と再婚し二人の娘に恵まれた。スペイン生まれの現在10代後半の長女は、地元のスペイン人に面倒を見てもらって育ったが、13歳の時に親が中国でのビジネス機会を探るのに合わせて青田県と一緒に戻った。青田県で生まれた現在7歳の次女は、ずっと青田県で生まれ育っている。Hさんは次女を海外留学させる予定はなく、中国でこれからも生きていってほしいと述べた。

## 2 事例2：Aさん家族の場合

### (1) イタリアへの移住

Aさんは1979年に青田県で生まれた。家が貧しいため、13歳まで叔母の養女となり、温州市で暮らしていた。父親が海外移住を決めた時、Aさんは青田県に戻り、地元の中学校に入学した。そして、彼女が高一の時、突然父親に「3日間で出国の用意して、パリかミラノへ行きなさい」と言われた。当時16歳のAさんは外国のことを何も知らないまま、イタリアにいる姉を頼って、1995年1月に一人で観光ビザでイタリアへ向かった。まだ高校一年生のAさんにとって、イタリアの高校に入るという選択肢もあったが、中国に残されている母親に送金するために一刻も早く働きたいと、姉のいる中華レストランで働き始めた。

最初の6年間は出国債務を返済するために、イタリアのいくつかの都市を転々として、中華レストラン、ホテル、果物パッケージ工場などで毎日10数時間も必死に働いた。Aさんは外向的な性格で、独学でイタリア語をマスターし、イタリア人の友達もたくさんいる。2001年、Aさんは結婚し、上海出身の夫と一緒にイタリアの地方都市で中華レストランを開業した。間もなくして長男が生まれたので、現地のイタリア人家政婦に育児を託していた。レストラン経営は順調であったが、夫との生活が上手くいかなくなり、2002年に離婚した。その後、彼女は一人で育児をしながら、レストランを経営していた。2010年にミラノへ移住し、新しく内装会社を立ち上げた。

### (2) 帰国

Aさんはイタリアの生活に馴染み、ヨーロッパの経済危機以降中国市場に興味はあったが、帰国を考えたことがなかった。しかし、2014年、中国人の友達から、中国国内でネットショッピングが急速に普及しているので、中国でイタリアのアクセサリーを販売するときと繁盛すると中国での起業を勧められたことがきっかけで、帰国を真剣に考えるようになった。Aさんはアクセサリーが好きで、よくお土産として、イタリアのアクセサリーを中国の友人に贈っていた。ちょうどその頃、青田県政府は海外在住青田県出身者に向けて商品城の入居店舗を募集していた。これをきっかけに、Aさんはミラノで独自のアクセサリブランドを立ち

上げ、2014 年に帰国し、2015 年に商品城第一市場でイタリアから仕入れたオリジナルデザインのアクセサリー店を開業した。最初の 2014 年から 2018 年の 4 年間、A さんはイタリアの会社を経営しながら、イタリアと中国を行き来していた。中国のビジネスが軌道に乗った後、A さんは思い切ってビジネス拠点を完全に青田県に移すことを決心し、2018 年からほとんど中国にいるようになった。2019 年 10 月には商品城第三市場でイタリア人シェフを雇い、イタリアンレストランを開業した。

A さんは長年イタリアで生活していたため、帰国後再びカルチャーショックを受けたことも少なくない。中国の流行語や考え方、人との付き合い方などが複雑で、イタリア人の方が単純で付き合い易いと語った。今後 A さんは中国でのビジネスに専念するが、イタリアの気候や生活が好きだから、休暇の時はイタリアで過ごしたいと考えている。現在は中国で過ごす期間が長い、商品の仕入れや休暇の時にはよくイタリアへ行っている。ビジネスは中国、生活はイタリアという理想的なライフスタイルを目指し、両国とも密接なつながりを保ちながら行き来している。

### (3) 家族の移住経験

結婚前の A さんは 7 人家族で、両親と姉一人、妹二人、弟一人である。母親と妹一人以外の家族全員が海外へ移住した。A さんの父親は 1991 年にモスクワへ出国し、その後ウクライナのキエフへ渡った。父親は最初蛇頭<sup>10)</sup>の仕事をしていたが、真面目な仕事をしようと港都市のオデッサへ移住し、そこでアパレル系の輸出入業に携わっていた。浙江省義烏市や温州市、広東省から洋服を仕入れて、オデッサのコンテナ倉庫で販売していた。しかし、ウクライナの政治情勢の悪化によって、父親は中国市場に関心を持ち、徐々に中国の鉱山業や不動産業などに参入し始めた。2007 年に帰国し、中国とウクライナを行き来していたが、現在 70 歳の高齢となり、青田県でゆったりとした老後生活を送っている。

A さんの姉は 1993 年に父親を頼って観光ビザでウクライナへ入国した。イタリアでの不法移民正規化の情報が入り、姉は 1994 年にイタリアへ移動した。父親の知人のレストランで働きながら、正規化を待っていた。A さんも同じく 1995 年に観光ビザでイタリアへ行き、しばらくして合法化された。A さんの二人の妹は、一人が病気がちのためずっと中国で母親と暮らしているが、もう一人の妹は 2002 年にスペインへ移住し、現在バルセロナで店を経営している。A さんの弟は中国の大学を卒業した後イギリスへ行き、その後アフリカで 2 年間働き、現在はポーランドにいる。

A さんは結婚後、2001 年に息子が生まれ、イタリア人家政婦に預けた。息子が 2 歳半になっ

10) 蛇頭とはスネークヘッドともいわれ、人の密航を斡旋する地下組織の俗称である。

た時、上海の祖父母の元に送られた。小学校4年の時にイタリアへ戻され、高校卒業後、ミラノにある中国系の会社で働いている。Aさんは中国市場が大きいため、ビジネスの未来は中国にあると信じ、2019年に息子を中国へ呼び戻したが、彼は中国社会に馴染めず、結局3カ月の滞在後ミラノに帰った。息子は将来ミラノで独立して起業する意思を固めている。

### 3 事例3：Dさん家族の場合

#### (1) セルビアへの移住

1981年青田県生まれのDさんは、両親との3人家族で、1990年代末から2000年代初期に両親と共にセルビアへ移住した。最初は青田出身の貿易商から日用品などの雑貨を卸して、露店などで売って生計を立てた。ある程度の開業資金を蓄積した後、店舗を借りて国際貿易会社を立ち上げた。主に浙江省義烏市から日用雑貨を仕入れて売った。ビジネスが軌道に乗った後で、現地のセルビア人を販売員として雇った。

Dさん家族の中国国内貿易拠点は義烏市に置かれ、両親はセルビアで商品を売り、Dさんは義烏市で輸出代理会社を経営し、商品を仕入れてセルビアに輸出していた。Dさん家族は両親が主にセルビアに、Dさんはセルビアと中国を行き来する形で輸出入業を営んでいた。ビジネスの状況に応じて、Dさんは年に多い時は5カ月、少ない時は2カ月ぐらいセルビアに滞在していた。

2000年Dさんは試しにセルビアのワインを中国へ輸入したが、予想外に売れ行きが好調なので、日用品雑貨からワインの輸入業に転じた。セルビアのワインはフランスやイタリア、スペインのワインほど知名度が高くないが、品質が高い。Dさんは、2004年から2014年の10年間ずっとセルビアと中国を行き来していた。多い時は年に5回ぐらい、少ない時で2回ぐらいセルビアへ行き、毎回1カ月間滞在した。

#### (2) 帰国

2006年モンテネグロが独立し、ユーゴスラビアが解体し、セルビアとモンテネグロが分裂した。その後の経済不況下で、セルビアの警察が現地の中国人から保護料を取るなど、商売がだんだん難しくなった。2008年に警察との間にトラブルが起きて、セルビア在住のDさんの親戚は帰国したり、モンテネグロ、ポーランド、メキシコへ再移住したりした。

Dさんは、いくつかのセルビアのシャトー<sup>11)</sup>の中国市場販売代理権を取得し、セルビアとモンテネグロの希少なワインの専門輸入商として評価を得るようになった。最初、義烏市の国際商貿城に店舗を構え、セルビア産とモンテネグロ産のワインを卸売した。2013年に習近

---

11) シャトーとはワインの製造を行う生産者のことを指す。

平国家主席が「一帯一路」（シルクロード経済ベルトと 21 世紀海上シルクロード）を提唱してから、多くの中国国営企業がセルビアへ進出し、現地の経済活性化を促進した。D さんはこれをビジネスチャンスとして捉え、義烏市で貨物輸送代理会社を起業し、セルビアの中国国営企業にクレーンなどの機械設備を提供している。D さんは頻繁にセルビアと義烏市を行き来し、年間 3,000 個コンテナを輸出していた。

セルビアで結婚した D さんの帰国のきっかけは、青田県僑郷輸入商品城の誘致戦略であった。2015 年に商品城が開業されるまで、国際貿易に従事する青田県出身者の多くは国内拠点を義烏市、寧波市や上海市などに置いた。青田県政府は商品城の入居店舗を誘致するために、わざわざ義烏市の国際商貿城へ行き、そこに店舗を構えている青田県出身者に声をかけた。それをきっかけに、D さんは 2014 年にセルビアのビジネスを親戚に託し妻と共に帰国した。2015 年に会社を義烏市から青田県にある商品城に移し、ワイン輸入業と貨物輸送代理に力を入れてきた。D さんとともに、他に 3 人の青田県出身者も店舗を義烏市から青田県の商品城に移転した。

商品城第一市場には約 100 店舗が入居している。商品城は青田県政府の管轄に置かれているが、2015 年に青田県僑郷輸入商品城商會が設立され、D さんの奥さんが商會副會長を務めている。現在 D さんの会社は 10 社のセルビアのシャトーと取引し、70 種以上のワインブランドの販売を手掛けている。今後 D さんはワインを通してセルビアの文化を中国社会へ紹介し、架け橋として中国とセルビアの友好関係構築に力を入れたいと語った。現在は青田県で過ごすことが多く、年に一回ワイン代理業者をセルビアに連れてワインの産地を巡り、これを通して、セルビアの文化を中国に紹介しようと努力している。

### (3) 家族の移住経験

D さんは、セルビアでロシア在住の青田県出身者と出会って結婚した。義理の両親は 90 年代にロシアへ出稼ぎに行き、D さんの妻は 1988 年にロシアで生まれた。彼女は生後すぐ青田県に送られ高校まで祖父母の元で育った。高校卒業後、出国の準備として上海市で一年間ロシア語を勉強し、ロシアの大学に合格し卒業した。

D さんの両親は 2012 年に義烏市の国際商貿城にある D さんの会社を手伝うためにセルビアから青田県に帰国した。妻の両親も青田県に帰国している。義理の兄一家は現在セルビアで商売をしている。義理の弟はセルビアで生まれ、セルビア人家政婦に 3 歳まで育てられ、その後青田県に送られ、高校卒業まで青田県にいた。イギリスの大学に合格しているが、コロナの影響で現在はまだ中国にいる。

D さんの一人娘は青田県生まれで、現在青田県の幼稚園に通っている。子どもの将来について、D さんは娘を海外へ行かせることを考えていないと語った。

#### 4 事例4：Jさん家族の場合

##### (1) フランスへの移住

Jさんは1973年に青田県で生まれた。1996年に大学を卒業後、青田県で高校教師として5年間勤めていた。2001年に仕事を辞め起業し、さらなるビジネスチャンスを探すために、2004年にフランスへ渡った。彼は90年代に出国した青田県出身者と違い、中国である程度ビジネスに成功してから、海外市場を開拓するために出国した。

Jさんは最初、フランスを拠点に中国人向けの移民仲介、為替業務、観光などを中心に様々なビジネスを展開した。中国経済の発展につれて、海外ブランドへの需要が高まってきたので、フランスの化粧品を中国へ輸入し販売し始めた。最初は売れ行きが良かったが、化粧品市場競争の白熱化により利益が激減した。そこでJさんは人気の高いフランス産ワインに目を向けた。中国には「小さい船が方向転換しやすい」ということわざがあるが、Jさんの経営方針はまさにその通りであり、化粧品輸入業を中止し、ワイン輸入業に参入した。

##### (2) 帰国

Jさんは2015年に青田県僑郷輸入商品城に出店するために、フランスから青田県に戻った。中国国内には大手海外ワイン貿易会社があるにもかかわらず、青田県出身者がワイン輸入業に一番相応しいと語った。海外青田県出身者ネットワークは世界中に広がり、注文されたシャトーのワインを電話一本で現地にいる青田県出身者に頼み、迅速に入手できるからである。商品城には青田県出身者が世界各国から仕入れた種類豊富なワインがあり、値段が何10元から何10万元までの品物が揃っている。Jさんの会社は主にフランス産のワインを取り扱っている。値段は100元から300元ぐらいで、ターゲットは中国国内の自営業者とサラリーマンである。また、中国国内でのさらなる発展を求め、2016年に西安市に2019年に吉林省梅河口市にもワイン店を開業している。

Jさんは2015年以来、中国にいる期間の方が長い、フランスでのビジネスを継続している。将来は中国を拠点に、会社をグローバルに展開する予定である。

##### (3) 家族の移住経験

Jさんにはヨーロッパ在住の親戚が多数いる。親戚のほとんどは1990年代に出国し、海外でまず借金返済のために数年間働き、資金を蓄積した後に起業している。Jさんはそのような一般的な青田県出身者の成功ルートよりも、まず中国で起業し、成功した後に海外へ投資するというルートを選んだ。Jさんには現在中国の大学に通っている一人息子がいるが、子どもを海外で働かせることに反対している。留学やビジネスについて学ぶために短期間海外生活を送ることには賛成であるが、中国には優れた文化があり、子どもはこれをしっかり身



に付けるべきだと考えているからである。Jさんの周りには、幼少時に海外へ行った人がいるが、中国への帰属意識が低く、逆にヨーロッパ文化の悪い習慣を身に付けているのを見て、とても残念だと述べた。

## IV 考察

本章では、第Ⅱ章と第Ⅲ章のデータを踏まえて、第一に、商品店の開業や新型コロナウイルスのパンデミックという近年の状況の変化の中での僑郷としての青田県の変化の特徴、第二に青田県への帰国者とその家族にみる移民ハビトゥスがどのように変容したのかを考察する。

### 1 ビジネスチャンスを生む場としての僑郷

対象者 12 名は、スペイン生まれの E さん以外は、本人の意思、あるいは家族の都合でやむを得ず、ヨーロッパ在住の家族や親族を頼って 1990 年代から 2000 年代に 10 代後半から 30 代でヨーロッパへ移住していた。マスデウ [2018] は、海外移住は青田県の若年層では「よりよき人生のため」の通過儀礼になっていると述べているが、この指摘は対象者にも当てはまる。

海外移住の背景については、1990 年代の浙江省温州市でのフィールドワークに基づいたリー [Li 1999] の指摘が、本論の対象者の多くやその親世代の場合にも適用できると考える。リー [Li 1999] は、温州市にはヨーロッパへ移民すればお金持ちになれるという共通認識を生み出すような「移民文化」があり、それが、温州市の経済が成長し、中国もヨーロッパも移民制限をしても、ヨーロッパへの連鎖移民が続く要因であるとしている [Li 1999]。ほとんどの対象者にみられる海外移住は、親族や家族を頼って借金をしてでも海外に行こうとするもので、「移民文化」を形成してきた青田県僑郷にみられた伝統的海外移住の延長上として捉えられる。A さんは父親に「パリかミラノに行け」と言われ遠い親戚を頼ってイタリアに行き、出国負債を返すのに苦労したという伝統的な移住をした。H さんも同様に、青田県出身者の多いスペインやイタリアに移住した H さんと A さんの移住は、教育レベルの低い貧しい人が多く、伝統的連鎖移民の延長上として捉えられる。

しかし、J さんは青田県である程度ビジネスに成功してから、海外市場を開拓するために出国していた。J さんの移住先であるフランスは、青田県からの海外移住の歴史が長い、J さんのように伝統的移住とは関連のない人もいることがわかった。また、また A さんの弟は、中国の大学を卒業後イギリスへ留学し、アフリカを経て現在はポーランドで働いている。親族の中には個人を単位とした移住をしている者もいて、帰国者やその親族の移動には、伝統

的なものと現代的なものが混在していた。

そして、2000年代になってヨーロッパの経済不況と中国の経済発展によって、青田県から海外へ移住する若者は減り、帰国者が増加する傾向が顕在化している点に本論では焦点を当てた。特に近年、青田県政府は一連の優遇政策を打ち出し、華僑資本の誘致に力を入れ2015年に商品城を開業したが、対象者は商品城に店舗を構える、あるいはそこで働いているヨーロッパからの帰国者であった。パルセロナで生まれ育って親の都合で帰国したEさん以外の対象者は、ビジネス上のメリットが帰国の最大の要因となっていた。村官になることや故郷在住の親の面倒をみるため、海外生活への嫌気なども帰国の背景にある要因であった。青田県政府による商品城の開業と優遇政策は、政府の戦略通り、海外移住者の重要な帰国要因となっていた。陳程[2016]は浙江省への帰国者の統計データに基づいた人口学的視点から、帰国者は高度人材が中心で、帰国地は故郷ではなく、杭州市や寧波市など長江デルタに集中していると指摘している。しかし、青田県での商品城の開業によって、Jさんのように中国の別の都市でビジネスを展開していた青田県出身者も、商品城での出店のために故郷である青田県に帰国していた。

近年の僑郷の変化に関する先行研究では、前述したように、観光資源への移行が指摘されたり[川口 2019]、国内からの出稼ぎ労働者の存在が大きくなったり[稲澤 2016, 兼城 2016]、投資開発区の開設によって外資系企業が参入したりしていることが指摘されている[李 2005a]。本論では、青田県政府による商品城開業や優遇政策という投資誘致戦略によって、海外在住の青田県出身者にとって「僑郷」が新たなビジネスチャンスを生む場として変化したことを示した点に意義があるといえる。出稼ぎ労働者や外資系企業に関わる外からの人口流入ではなく、海外移住者の僑郷への帰国現象に焦点を当てた報告はほとんどされていない。帰国した中国系新移民の研究は少なく、伝統的な移動と連続性のある者もそうでない者も、僑郷に新たなビジネスチャンスを見い出したことによる帰国現象が提示できたことによって、中国系新移民研究に貢献できたと考える。さらに、2020年の新型コロナウイルスによるパンデミックは、中国政府のコロナ対策への信頼を強め、対象者に帰国の選択が正しかったことを確信させたことを明らかにした。これは今後の感染終息に向かうであろう歴史的経緯の一地点の記録として意味をもつと考える。

## 2 移民ハビトウスからトランスナショナル・ハビトウスへ

これまで多くの研究者によって、出身地での経験と移住先の状況を常に比べ対称化するという「移民にみる二元的参照フレーム (the immigrant's dual frame of reference)」について言及されてきた[Suárez-Orozco and Suárez-Orozco 1995]。青田県とヨーロッパを結ぶトランスナショナルな空間で移動の選択をしている対象者も、常にヨーロッパの状況と中

国の状況を比べるという二元的参照フレームを保持し、ビジネス上のメリットを優先して帰国の選択をしていた。

川口 [2016] は、僑郷研究にみられる華僑華人と僑郷との関係を捉える特殊性とし「海外 / 華僑は豊かであり、中国 / 僑郷は貧しい」という構図を指摘している。しかし、A さんのように「ビジネスは中国で、生活は好きなイタリアで」と考えている者、J さんのように中国を拠点にビジネスを展開しようとしている者がいて、ヨーロッパに比べて中国はもはや貧しくはなく、この構図は崩れていた。

1990 年代まではヨーロッパに移住した青田県出身者は、移住先で苦労しても「青田県にいるよりは稼げる」という二元的参照フレームに支えられ、これが青田県出身者の移民ハビトゥスを形成していた。しかし、2000 年代の経済状況の変化によって、中国の方がビジネスチャンスを生む場所となり、青田県の商品城開業は僑郷がそうした場所として変化したことを象徴するものであった。山本 [2014] は、ヨーロッパの中国系新移民の特徴として中国との経済的結びつきに依存したインターナショナルな経済活動の展開を指摘したが、本論の対象者にも当てはまる。10 年以上に亘って中国とセルビアの間の移動を繰り返していた D さんにみられるように、彼ら / 彼女らは、中国と海外の両方を視野に入れて、ビジネスでも生活でもその時点で良いと判断した方に柔軟に移動を繰り返していた。現在は青田県をビジネスチャンスが生まれる場所として捉え帰国し、さらに新型コロナウィルスが海外への移住を制限していた。

グアルニゾはドミニカ共和国とアメリカの間の移動を繰り返している移民をトランス・ミグラントと呼び、こうした移民は国境を超えて生活を紡ぎ、トランスナショナル・ハビトゥスを形成していると述べている [Guarnizo 1997]。ここでいうトランスナショナル・ハビトゥスとは、一連の二元的傾向であり、それは移民をして考慮して状況に対応して行動させるもので、行為や社会文化的ルールを単に意識的受容させないものである [Guarnizo 1997: 311]。

青田県に帰国した対象者のライフヒストリーには、かつての「海外 / 華僑は豊かであり、中国 / 僑郷は貧しい」という構図に基づいてヨーロッパに移住した移民ハビトゥスから、グアルニゾのいうトランスナショナル・ハビトゥスへの変容が読み取れる。「移民文化」を背景に海外移住した対象者は、移住先で中国との経済的結びつきを保ち両者間を移動し、ビジネスの拠点を中国に移す者もいた。商品城開業に伴う帰国の選択は、そうした移住先と中国間の移動を繰り返すトランスナショナル・ハビトゥスの延長上として捉えられる。帰国後も二元的参照フレームを保持し、ヨーロッパでの経験を生かしビジネスを営みその関係を断ち切つてはならず、将来的には再度ヨーロッパへの移住の可能性もある。ヨーロッパに残っている親族も多く、繋がりを保っていた。そして、義烏市から青田県へビジネス拠点を移した D さ

んの事例にみられるように、世界のネットワークの接点となっている義烏ネットワーク<sup>12)</sup>が青田県出身者のネットワークに結びつき拡大していた。このように、トランスナショナル・ハビトゥスはネットワークのグローバルな広がりをさらに拡大し、中国と移住先を一つの社会文化的、経済的、政治的領域として繋げる可能性があると考ええる。

対象者家族の移住経験に反映されている世代的変遷の観点からみると、ヨーロッパに行けば稼げるという移民ハビトゥスを持っていた60代から70代の対象者の親世代は、老後の生活を送るために青田県に帰国し、対象者である40代から50代の世代は、ヨーロッパと青田県の両方を見据えながらビジネス上のチャンスを見いだして青田県に帰国していた。中国とヨーロッパ間の移動を経験しながら成長した子ども世代は、主体的判断によって自らの居住地を選択し、親の出身地である青田県との関係性は多様であった。対象者にとってビジネス上のメリットが移動の選択の重要な要因となっていたが、子ども世代の場合は社会化過程が影響し、移動の背後にある要因がより複雑化している。それゆえ、40代から50代の対象者にみられたトランスナショナル・ハビトゥスは、移動を経験しながら成長する子ども世代に受け継がれながら、今後さらに変容をしていくと考えられる。

## お わ り に

本論は、古くから多くの海外移住者を送り出してきた中国浙江省青田県に、近年ヨーロッパから帰国した青田県出身者のライフヒストリーの分析を通して、彼ら/彼女らが移住先と出身地を結ぶトランスナショナルな社会的空間の中で、どのように移動を選択しているのかを明らかにすることを通して、移民ハビトゥスの変容について考察した。

青田県には、1990年代から2000年代の初めにはヨーロッパに行けば稼げるという「移民文化」があったが、海外移住者の約8割が帰国している現在、もはや消えゆくものとなっていた。中国との経済的結びつきに依存したインターナショナルな経済活動を展開している対象者は、中国とヨーロッパの間の移動を繰り返していた。商品城の開業に伴いビジネスチャンスを生む場所となった青田県への帰国は、トランスナショナル・ハビトゥスの延長上として捉えることができた。今後、ヨーロッパや中国で生きていく次世代が、親の出身地、あるいは「中国」をどう意味付けて生きていくかは興味深い課題であり、それによって親から受け継がれるトランスナショナル・ハビトゥスはさらに変容していくであろう。

12) 陳肖英 [2018] は華商ネットワークという視点から義烏小商品市場のグローバルビジネスを分析し、四重ネットワークモデルを用いて、義烏が30年の発展を経て、世界の商品、商人、物流、資金、情報などのネットワークの節点であると指摘している。

附記：本論は、東洋大学井上円了記念研究助成・海外協定校共同研究「中国浙江省出身の若者にみるトランスナショナリズムに関する教育人類学的研究」（研究代表者：山本須美子，2020 年度），及び、東洋大学井上円了記念研究助成・アジア文化研究所プロジェクト「首都圏在住アジア系の若者にみるトランスナショナリズムに関する比較研究」（研究代表者：山本須美子，2019 年度 -2021 年度）の研究成果である。

## 参 考 文 献

〔中国語文献〕

陳達

1938『南洋華僑与閩粵社会』北京：商務印書館。

陳国強

1994『福建僑郷民俗』厦門：厦門大学出版社。

陳程

2016『大陸海外新移民的回模式与空間特徴研究——以浙江省為例』華東師範大学提出博士論文。

陳鳳蘭

2017「華僑村官与僑郷社会治理資源的跨国動員——以福建省明溪縣為例」『華僑華人歴史研究』3 月第 1 期：19-28。

程詩天

2017「加拿大移民回流現象原因分析及对策研究」『管理觀察』14：95-96。

陳肖英

2018「海外華商網絡空間結構新探——以義烏市場為切入点」『華僑華人歴史研究』9 月第 3 期：14-21。

李明歡編

2005『福建僑郷調査——僑郷認同，僑郷網絡与僑郷文化』厦門：厦門大学出版社。

李明歡

2005a「僑郷識同的歴史記憶——一個傳統僑郷的現代表述」『福建僑郷調査——僑郷認同，僑郷網絡与僑郷文化』李明歡編，35-95 ページ，厦門：厦門大学出版社。

李明歡

2005b「僑郷網絡的現代拓展——一個新興僑郷的現代建構」『福建僑郷調査——僑郷認同，僑郷網絡与僑郷文化』李明歡編，96-155 ページ，厦門：厦門大学出版社。

林勝

2019「僑郷跨国家庭の形成——維持と挑戦」『求索』2019年第2期：143-150.

青田県人民政府僑務弁公室・青田県統計局・青田県帰国華僑連合会

2015『青田県基本僑情調査分析報告』.

青田華僑史編纂委員会

2011『青田華僑史』杭州：浙江人民出版社.

青田県僑郷輸入商品城

2018『青田洋物』10月号.

青田県文化与広電旅行体育局

2019『游青田』11月号.

向遠菲

2008「加拿大移民回流研究」『時代文学』1: 192.

許金頂

2005「来来往往——福建僑郷の歴史社会学考察」『福建僑郷調査——僑郷認同，僑郷網絡与  
僑郷文化』李明歆編，268-327 ページ，厦門：厦門大学出版社.

張祥熙

2018「一带一路視閥下的塞爾維亞華僑華人」『八桂僑刊』1: 11-18.

顏廷・張秋生

2015「澳大利亞華人新移民回流歷史——現狀與趨勢」『華僑華人歷史研究』4: 16-27.

〔日本語文献〕

稲澤努

2016「「僑郷」における移動の変化と変わらぬ「豊かな香港」イメージ——広東省汕尾の事例から」『僑郷——華僑のふるさとをめぐる表象と実像』（中国の底流シリーズ6）川口幸大・稲澤努編，45-84 ページ，行路社.

兼城糸絵

2016「「移民」が支える神祇祭祀——福建省福州市の僑郷の事例から」『僑郷——華僑のふるさとをめぐる表象と実像』（中国の底流シリーズ6）川口幸大・稲澤努編，85-114 ページ，行路社.

川口幸大

2019「21世紀の僑郷——華僑のふるさとの観光地化」『華僑華人研究』16: 49-63.

2016「僑郷とは何か」『僑郷——華僑のふるさとをめぐる表象と実像』（中国の底流シリーズ6）川口幸大・稲澤努編，5-19 ページ，行路社.

川口幸大・稲澤努編

2016『僑郷——華僑のふるさとをめぐる表象と実像』（中国の底流シリーズ 6）行路社.

奈倉京子

2018「序章 中国系新移民の新たな移動と経験」『中国系新移民の新たな移動と経験——世代差が照射する中国と移民ネットワークの関わり』奈倉京子編, 9-34 ページ, 明石書店.

2016「帰国華僑ネットワークの拡大と新世代の華人の新たな移動から見る「僑郷」の変容」『僑郷——華僑のふるさとをめぐる表象と実像』川口幸大・稲澤努編, 193-236 ページ, 行路社.

奈倉京子編

2018『中国系新移民の新たな移動と経験——世代差が照射する中国と移民ネットワークの関わり』明石書店.

マスデウ, イレネ・トルエジャ

2018「中国——スペイン間を移動する華人子弟」『中国系新移民の新たな移動と経験——世代差が照射する中国と移民ネットワークの関わり』奈倉京子編, 158-188 ページ, 明石書店.

山下清海編

2014『改革・開放後の中国僑郷——在日老華僑・新華僑の出身地の変容』明石書店.

山下清海・小木裕文・張貴民・杜国慶

2012「浙江省温州市近郊青田県の僑郷としての変容——日本老華僑の僑郷からヨーロッパ新華僑の僑郷へ」『地理空間』5 (1) : 1-26.

山本須美子

2014「ヨーロッパにおける「新しい」中国系コミュニティの特徴——イタリア・ハンガリー・ドイツの場合」『東洋大学社会学部紀要』52 (2) : 87-101.

[英語文献]

Beltrán Antolín, Joaquín

2005 'Chinese Entrepreneurship in Spain: The Seeds of Chinatown', In Spaan , Ernst, Felisitas Hillman, and Ton van Naerssen T.(eds.), *Asian Migrants and European Labour Markets*, London: Routledge, pp.285-308.

Guarnizo, Luis Eduardo

1997 'The Emergence of a Transnational Social Formation and the Mirage of Return Migration Among Dominican Transmigrants', *Identities* 4(2): 281-322.

Li, Minghuan



- 1999 'To Get Rich Quickly in Europe: Reflections on Migration Motivation in Wenzhou',  
In Pieke, Frank N. & Hein Mallee (eds.), *Internal and International Migration: Chinese Perspectives*, Richmond: Curzon Press, pp.181-198.
- Masdeu, Torruella Irene
- 2014 *Mobilities and Embodied Transnational Practices: An Ethnography of Return(s) and Other Intersections between China and Spain*. Phd Thesis submitted to Autonomous University of Barcelona, Faculty of Translation and Interpretation.
- 2019 'Migrants' Descendants and New Mobilities between China and Spain',  
*International Migration* 19, <http://doi: 10.1111/imig.12619>.
- Nieto, Gladys
- 2003 'The Chinese in Spain', *International Migration* 41(3): 215-237.
- Suárez-Orozco, Marcelo and Carola E. Suárez-Orozco
- 1995 'The Cultural Patterning of Achievement Motivation: A Comparison of Mexican, Maxican Immigrants, Maxican American, and Non-Latino White Amerian Students'. In Rumbaut, Rubén G. and Wayne A. Cornelius(eds.), *California's Immigrant Children: Theory, Research, and Implications for Educational Policy*, San Diego: Center for U.S.-Mexican Studies, University of California, pp.161-190.
- [ウェブサイト]
- Instituto Nacional de Estadístia (INE)
- 2020 'Demography and Pupulation Population figures and Demographic Censuses/ Population figures at/ Series detailed from 2002', 2020 年 11 月 24 日アクセス.  
<http://www.ine.es/jaxiT3/Tabla.htm?t=9674&L=1>
- SINA 新波財經
- 2011 「欧債危機影響——希腊 2 万華人 30%另謀出」, 2020 年 10 月 21 日アクセス.  
<http://finance.sina.com.cn/roll/20111226/082011061701.shtml>